

第11期叡王戦五番勝負第1局 大盤解説会突撃レポート!

南十字星編集委員会



大盤解説会の様子

将棋界の八大タイトル戦の一つ、叡王戦が海を越え、シンガポールの地に上陸しました。2026年4月3日(金)、シンガポール日本人会を舞台に開幕した第11期叡王戦五番勝負第1局。日本とシンガポールの外交関係樹立60周年を祝う記念事業として実現したこの対局は、伝統文化の枠を超えた国際親善の場となっています。

日本の伝統文化である将棋が、なぜ今、赤道直下のシンガポールで開催されるのでしょうか。そこには伝統の国際化という大きな志があります。アジアのハブであり、多様な文化が交差するシンガポールでの開催は、将棋を世界のボードゲームへと進化させる象徴的な一歩といえます。また、主催を務める不二家にとっても、シンガポールは東南アジア展開の重要拠点です。対局中、棋士の集中力を支える勝負おやつとして自社のスイーツを提供することは、日本の食文化を現地へ発信する絶好の機会ともなっています。

今期、盤を挟むのは、タイトル初防衛を目指す伊藤匠叡王と、2期連続の挑戦権を獲得した斎藤慎太郎八段です。両者は昨期と同じ顔合わせであり、宿命の対決として注目を集めています。

注目第1局は、先手の伊藤叡王に対し、後手の斎藤八段が応じる形で、序盤から激しい攻防が予想される相掛かりの戦型となりました。日本人会オーデトリウム(3F)で開催され

た大盤解説会には、現地在住の将棋ファンが詰めかけ、プロの一挙手一投足に熱い視線を送りました。解説には木村一基九段、飯島栄治八段、加藤桃子女流四段、そしてどうぶつしょうぎの考案者として国際普及に尽力する北尾まどか女流二段が登場し、豪華な顔ぶれが会場を沸かせました。

極限の緊張感の中で戦う両者を支えたのは、主催の不二家が提供するスイーツです。本局では、午前のおやつに芳醇なバームクーヘン、午後には濃厚なチーズタルトが提供されました。

対局は125手までで先手の伊藤叡王が勝利し、シリーズ先勝を飾りました。終局後、伊藤叡王は、「2年連続のシンガポールで貴重な経験をさせてもらった。よいスタートを切ることができた。」と語り、充実感を漂わせました。熱帯の風が吹くシンガポールで、静寂の中に火花散る知力の格闘技が展開されたこの一日は、将棋史に刻まれる新たな一ページとなりました。

文責：編集部 シンガポール日本人学校
小学部チャンギ校

竹下雄貴

